

## 昨日のこと

チョン・ソヒョン

(辻本武 訳)

あれはいつ日のことだったか。昨日、警察が駐車場にやってきた。朝食前のティータイムをしようとしていたところだった。

駐車場は大通り沿いのビルの後ろ側にあるが、今にも壊れそうな建物に取り囲まれている。なかなか日の当たらないこの駐車場に日が差す時間は、早朝のわずかの時間と太陽が頭の真上にある時だけだった。駐車場の周りは、私が自分で植えた草花とどこからか種が飛んできて根を下ろした植物が育っていた。早朝の陽光がビルの谷間から入り込むほんの一瞬、駐車場は太陽の光がいつばいに差し込む庭園になる。私はその時間帯が好きだった。私はコーヒーの入ったカップを持ち、駐車場のプレハブ小屋の外に椅子を置いて座り、陽光を浴びる。野良猫と二羽の鳩が陽光を求めて闖入し、誰もいない寂しい光景の空間を埋めてくれた。この時間帯の人々はみんな自分の居場所から出て来ないし、誰もここを訪ねて来ないのであるから幸せに感じるのであった。

パトカーが駐車場に入ってきた。猫と鳩はいち早く逃げてしまい、静かな光景は無残にも壊れてしまった。警官は駐車場を営業しているのかと尋ねた。私がそうだと返事し、パトカーから料金を貰わねばならないのかどうかと思索していると、警官は身分証を見せてくれと言った。私がここにはないと答えると、障害者登録証でもいいと言った。「障害者」という言葉を聞くと、はつと我に返った。不自由な私の体を見れば、その言葉も間違っていないのだが、障害者について考えたこともなく、登録をしなければならぬということも知らなかったので、登録証なるものはなかった。私がすぐに答えないしていると、警官は耳をつんざくような声で叫んだ。

「障、害、者、登、録、証、で、す。聞、こ、え、ま、す、か？」

「オプソヨ(ありません)」とさつと答えたかったのだが、私の口からは「オプ、ト、ヨ」と呂律の回らない声が出てくるだけだった。警官はふうつと深くため息をつくとき、社長さんはいつ来るのかと尋ねた。

「来られません。仕事はみんな私がやっています。」

警官は私に何時から何時まで働き、時間給はどれくらいかを尋ねた。私は恥ずかしいことではしているとは思っていないから、あるがままに話した。彼は頭を大きく振りながら、社長の連絡先を尋ねた。私が答えないしていると、彼はもどかしそうに言った。

「おばさん、苦情が入ったのですよ。苦情、が。聞き取れますか？手助けしてあげますから、答えてください。」

「大丈夫です。何の問題もないですよ。」

私は苦情という言葉に心がびくつとした。警官は不審そうな目をして、私の住民番号を尋ねた。それぐらいは覚えていたが、「忘れた」と言った。警官はプレハブ小屋の中をちらっと横目で見て言った。

「ここで暮らしているのですか？」

「ここは事務所です。私にも家があります。」

立ち上がると、簡易ベッドをすぐに折り畳んだ。プレハブ小屋で暮らしているように見えるが、家があるというのにはウソではない。しょっちゅう行くことはないが、所帯道具を置いている家があった。警官は私の家の住所を尋ねたが、私はそれも覚えていないと言った。何となくそんな話をしたらいけないように思えたし、実際に覚えていなかった。私には覚えるというのが本当に苦手だし、ほとんど使っていない家の住所まで覚える必要はなかったからである。

「おばさん、どうせ結局はみんな分かることになるんですよ。ただ話してくればいいのに、二度手間になります。ずっと仕事しなくてもいいんですよ。助けてあげようと言っているんだから。」

「私がやりたくてしている仕事よ。助けて貰わなくてもいいです。」

警官は周辺を歩いて駐車場の入り口に積まれているゴミを指さし、いら立った口調で言った。

「おばさんがやりたくてしていることでも、社長さんが罰を受けますよ。それに、あそこで山

になっているゴミを片付けて下さい。このように山になっているから人がしょっちゅう捨てに来るんですよ。おばさん、こつちに来てちよつと見て下さい。これが駐車場なんですか？ゴミ捨て場ですよ。臭いがするという苦情がよく入ってくるんですよ、本当に。営業をしていないなら、扉を閉めるなりしなければいけないでしょ。これ、はなはだ迷惑なんですよ。」

警官が帰った時も駐車をいっばいに照らしていた陽光はまだしばらく残っていたが、私は冷めてしまったコーヒーを下水に流して捨てた。ちよつと前まではあれほど美しかった風景が、荒涼として汚れたように感じられた。駐車場は車六台がやつと入れるぐらい小さい上にセメントで舗装しただけで区画線もないので、有料駐車場とは思えず単なる空き地のようだった。心ない人間が夜間に入口に捨てたゴミ袋が山となつて積み重なつて駐車場の床面に侵入し、また駐車場の片隅では風に乗って舞い込んできた木の葉と紙屑の塊が転がり回っている。こういったものは私が毎朝片付けていたが、ただの汚物のように感じられ、そして駐車場の床面にべつとりとこびり付いた鳩の糞を見ると吐き気までした。しかし私自身も駐車場に転がり込んできたゴミでしかないように思えるし、またプレハブ小屋もやはり誰かが捨てていった廃棄物の家具と同じように見えるのであった。

母がこの場所に駐車を造成してから最初の七・八年ほどは景気が良かった。裏通りでちよつと便利が悪いけれど、道の向い側に衣類の卸商店街と古くからの市場があつて、駐車場にはお客さんが途切れることがなかった。駐車場が不足していた時代だったから、車を置く所が見つから

なかったお客さんが慌ててやって来たりして、料金を公営駐車場の二倍近く値上げしてしてもいつも満車だった。その後市場が建て替えられ、衣類卸商店街が改修されて駐車場が増えた時でも、ちよつと面倒でもお金を節約しようとする人たちが利用したりして大きな打撃にはならなかったが、昨年に大通りに高層のタワー式駐車場ができてからはお客さんが全く来なくなってしまった。駐車場の廃業を考えねばならないが、それを考えると食欲が落ちた。そうでなくても、母が駐車場をやめようと思うから自活していくようにと言うので、まだお客さんが入ると嘘をつき、自分の小遣いで売り上げを穴埋めしていたところだった。ところで一体どんな人間がこの駐車場の苦情を言っているのか、気になった。ひよつとして私が忘れていたのかと思って記録ノートをひっくり返して読んでみたが、長い間何事も起きていない。ほとんど毎日来ていたユルヒも、来なくなつてかなり経つ。

2

あれはいつの日のことだったか。昨日もユルヒがやって来た。自分には必要なくなったと言つて、プレゼントを持ってきた。車から降りた彼女の手に百貨店のショッピングバッグがあるのを見た瞬間、私は頭がはち切れんばかりに怒った。そのように怒つたのは大人になってから初めてのことだ、到底怒りを鎮めることが出来ず、机に頭をこつんこつんとぶつけた。頭が割れるほど

に痛くぶつてやつと、その痛みのおかげで怒りを和らげることが出来た。ユルヒはプレハブ小屋の外から私を見ていたが、私が動くのを止めるとシヨップینگバッグを渡した。訳が分からないという彼女の表情を見ると、鎮まっていた怒りがまた込み上がった。

実は彼女に二十年ぶりに再会したのは、この前の夏だった。駐車場では二ヶ月ぶりに来てくれたお客さんで、彼女は一方通行を間違つて入ってしまった近所をぐるぐる回つてようやくこの駐車場を見つけたとぶつぶつ言っていた。車のキーを預ける時も、私たちはお互いが分からなかった。私は暗いプレハブ小屋の中に座っていて、彼女の顔は半分以上がサングラスで覆われていたのであった。彼女は駐車場に戻って料金を支払う時に、昔聞き慣れていた私の声だったので思わずじつと見たという。その時私は自分が何かミスをしたから彼女が睨みつけたと思い、胸がどきりとした。しかし駐車した車が一台だけだったから車のナンバーを間違うわけがなく、レジを打ち直してみても間違いはなかった。もしや車のキーを早く出さなかったからかと思つて、そつと彼女の前に出した。彼女は私の名前と私の卒業した中学・高校の名前を挙げて、そうでしょうと聞いた。私がうなづくとき、自分が誰なのか名乗らずに大きな声を張り上げ、私の両手を掴んで上下に揺すりながら言った。

「あら、サンヒョン、サンヒョンでしょう。そう、サンヒョンよね。私が分からない訳がないでしょう。声だけ聞いても分かるわ。本当にサンヒョンだわ。これまでどうしていたの？元氣だった？」

彼女がサングラスをはずして顔を見せてくれたが、私には全く知らない顔だった。ぽかんと見ていると、彼女は自分の名前を出せば思い出すと思つたのか、自分の名前を言った。

「私よ、私。ユルヒよ。本当に分からないの？」

私は彼女の名前が十分に聞き取れず、聞こえた通りに「ユリ」と言い返した。

彼女はユリじゃなくユルヒだと何回も言ったが、ユリであれユルヒであれ、私には初めて聞く名前であることに違いはなかった。

「ユ、デイ、じゃなくて、ユ、チ。ユツ、チ。」

口の中で色々動かして名前を何度も言われた通りに呼んでみるが、口からよだれが流れ出るように、止めた。舌が口の中でいっぱいになるくらい大きくなってこわばり、自分の舌でないような気がした。自分のものでないのは舌だけでなく、頭もまた同じであつた。どんなに頭を絞つて思い出してみても、誰なのか全く記憶になかつた。ユルヒは私とは中学・高校の時に同じ学校に通つた大の仲良しだったと教えてくれた。しかし私に友人がいたなんて、私は当惑した。友人がいたなら、二〇年近い年月の間、一度も私を訪ねて来ないはずがない。私が全く思い出せないでいると、彼女は私が何組で担任の先生の名前が何だったか、私がクラスの委員長や副委員長をいつしたのか、その時自分たちがどれほど近い間柄だったのかという話をした。彼女が話したことには間違いはなかつたが、私の友人だったという話は信じられなかつた。その気持ち伝わつたのか、彼女は私が祖父母や叔母と一緒に暮らしていたという話や、お祖母さんがきな粉を練つて

混ぜた美味しい手打ちうどんを作ってくれたという話をした。またお祖父さんが近所の男子高校の校長として働いていて定年で退職したということや、お祖父さんの書齋にいっぱい並んでいた本棚と大きくて重そうなマホガニー製の机があったこと、お祖父さんが鼻先に挟んだ老眼鏡の中で大きくなった目を動かして「お前たちは誰だ？ 大人に出会ったら、まずは挨拶をしなければいけないぞ。」と言った時、まるで虎が自分の前にいるようで息が詰まったという話もした。そして季節が終わる頃、私の投身事故について話をしかけて、すぐに言葉を濁した。彼女が祖父の表情や甲高い声、偉そうにしてもユーモラスな言葉使いをそっくりに真似た時、ようやく私は自分の記憶の中から彼女が抜け落ちていることを知った。新しいことはなかなか覚えられないが、事故以前のことなんかはちゃんと記憶していると思っていたのだが、そうではなかった。考えてみれば、それまで昔のことをちゃんと記憶しているのかどうか確認する手立てが私にはなかったのだ。

「ごめんね、覚えていなくて。私がこのようになって。」

私は彼女を待たせておいたのが申し訳なく、プレハブ小屋の外に出て折り畳み椅子を広げて置いた。私の左足は自由が利かずにびっこを引き、左腕はぶるぶると震えていた。ユルヒは私が広げて置いた折り畳み椅子に私を座らせてから、おもむろに言った。

「おやまあ、どうしてこんなことになったの？」

こんな体で長く生きると、私の体を人がどのように見ているのか気にならなくなっていた。と



ころが彼女に出会って話をする、昔感じていた恥ずかしいという感覚が一気に戻って来た。

ユルヒはその日から朝早く夫と娘を送ると、すぐに私を訪ねて来るようになった。猛暑や大雨の日を除いて、ほとんど毎日訪ねて来るのだった。しかし私は、毎回彼女を見分けられなかった。夕方に別れた瞬間から彼女の顔と名前は私の頭の中で徐々に薄れていき、次の日の朝になるとほとんど消えていた。初めの何日かは、彼女の車が駐車場に入ると久しぶりのお客さんだと思つて挨拶した。彼女は自分を覚えることも見分けることも出来ない私に寂しいと言つたが、私としてはどうしようもなかった。彼女に会う度に記録ノートに彼女の名前を書き、似顔絵を描いた。彼女が話したことを書き留め、彼女が帰つた後でそれを声に出して読んだ。これは駐車場で仕事を始めてからの習慣だった。駐車場の仕事は車のキーを受け取り、帳簿に車のナンバーと出入庫時間を書き、簡単な料金計算をするぐらいだった。一番の心配は料金の計算をする時にミスをしてないかということだったが、時間がちよつとかかること以外は大丈夫だった。しかし車の運転手の顔が覚えられず、とんでもない人に車のキーを渡すミスをした。車を盗まれるかも知れないと不安になった体験から、ノートを一冊買つてメモを取り始めたのだ。車のナンバーを書きとめ、車のシンボルと運転手の似顔絵を描いた。メモすることによって記憶力が取り戻せると思つたが、これは大して効果がなく、絵を描くのが上手になつただけだった。記憶力回復には失敗したが、ノートが記憶を補完してくれるので、ずうっと続けて習慣になると馴染みのお客さんの一人二人ぐらいは覚えることが出来るようになったのである。私は一週間ほどで、ノートを見なくても彼

女の顔と名前、彼女の車種とナンバーを覚えた。このように早く覚えることが出来たのは、彼女からのプレゼントが一役買っていたのだった。

彼女のプレゼントは缶コーヒーやパンのようなおやつ程度から始まって、自分にはもう必要なくなつたものだからと言って新品のアクセサリー、靴や服なんかで、段々と大がかりになつていった。私は毎回辞退したが、彼女は自分たちの間に遠慮なんてものは必要ないのだから受け取るようにと言つた。けれども私はそのプレゼントを受け取ることも断ることも出来なかつた。礼儀上断るといふことでもなく、ユルヒに借りを作るのが嫌だとかプライドが傷つくとか、そういうこともなかつた。それらのプレゼントが私には必要がなく、必要もないものをわざわざ持たされるという状況が嫌だつたのだ。私に必要なものは、季節ごとに着る三・四着の服と靴二足、ローションくらいだ。既に持っているものが重なつて余分になると、母や近所のおばあさんにあげたり、役場のリサイクルセンターに寄付した。これ以上使えなくなるぐらいまで使い切つてやつと自分のお金で新品を買うのであつて、何個も買い置きしておくのが嫌な性格だつた。私はユルヒから貰つたプレゼントを捨てることも人にあげることも出来ず、ショッピングバッグに入れたまま机の下に積んでおいた。そんなことが何回も繰り返すと、机の下はショッピングバッグでいっぱいになり、足を入れられなくなつた。机の下で山のようになつたショッピングバッグを見るとうんざりするばかりで、だからユルヒの顔と名前を早く覚えることが出来たのだった。

私はこのうんざりした気持ちを隠し、喜んだふりをして彼女を迎えて椅子を取り出し、コーヒ

ーを入れてやった。彼女はまるで私の記憶を取り戻さねばならない使命があるかのように昔の話をし、私はその話を聞き取ってメモした。彼女は、私自身が知らない過去の私をよく知っていた。彼女によれば、私は国史の先生が食事時間に試験用紙を預けるくらいに正直な子供で、弁当を持って来れない子に自分の弁当をあげたことのある優しい子供だった。そして彼女は私が同級生や先生たちから好かれていたと言ったが、しかし私は思春期にずうつと苦しめてられていた疎外感と孤立感を明確に覚えていた。だから私がみんなから好かれていたなんて、彼女の記憶間違いかそれとも私のためにウソを言っているのかと思つた。それ以外の彼女の話は、事故直後に完全に記憶を失ってから少しずつ取り戻してきた元の記憶とほとんど同じだった。ところが不思議なことに、私の記憶の中には彼女がいなかった。他のことは覚えていても彼女だけを忘れてしまつているという事実、これを言い出せば彼女は非常に寂しがると思つたので、昔のことはほとんど思ひ出せないと言つておいた。

彼女は度外れに記憶力がいいのか、それともウソをつくのが上手いのか、昔のことを微に入り細に入り話した。それは私が描く途中で放つておいたままにしておいた風景画についての話であった。当時の私は筆を洗うのが邪魔臭くてウルトラマリン(群青色)やビリジアン(濃緑色)、バーントアンバー(赤褐色)の絵の具をそれぞれ筆につけておいて、その三種の色の組み合わせで絵を描いていた。そのために水彩画の彩度が落ちて非常に陰鬱になっていたのだが、彼女はそれを覚えていたのだつた。彼女の記憶がそれだけ鮮明で具体的であるなら、それに比べて私の記憶はぼ

こぼこの穴だらけである。どの部分に穴があるか、それが分からないのだった。最初は彼女と私の記憶を比較して、私の忘れているところが何なのかを推測してみた。しかし昔の話をずっと聞き続けると、ある考えに到達した。それは、彼女を含めて記憶の穴というものは重要ではないから記憶に残っていないということだ。それらはもう過去のことであり、私はその記憶がなくてもちゃんと生きてきた。おそらく私が頭に怪我がなかったとしても、二〇年以上過ぎると完全に忘れてしまう程度のものであったのだ。私はそのように考えると何も心配することがなくなった。だから私は彼女がもう話を止めてくれればいいのにと思うのだが、余りに熱心に話すので言えなかった。ただそれ以上は彼女の話を聞いてもメモをしなくなり、だから耳を傾けることもなくなったのだった。

私の気持ちが変わったのだが、彼女はそんなことに全く気付かないで一日中はしゃぎまわり、娘が学校から帰って来る夕方になってようやく家に帰った。彼女は駐車場にずっと居続け、それによって私の静かな日常は潰れてしまった。彼女は私が拒否したくなる話をしょっちゅう持ってきた。一緒においしい店を食べに回ろうとか、スイミングやアクアロビックをしようとか、文化センターに通ってあれこれ習い事をしようとかいう話であった。特に文化センターの美術や作文、歌や楽器の講習が私の病気を治すのに大きな助けになるからと勧めた。しかし私の体はもはや治そうとして治るものではなく、また心はすでに落ち着いてそんなことをしなくても大丈夫だというところが、ユルヒには分からないようだった。そんな事情をしゃべるのが邪魔臭くて、ごく簡単

に駐車を留守に出来ないからと断った。彼女は車が入ってくるのを見たことが全くないのに、なぜ駐車の営業を続けるのか理解できないと言った。そして駐車のこの狭いプレハブ小屋にずっといると精神状態がもつと悪くなるから仕事を変えてみたらどうかと言った。しかし私は自分の人生の半分を過ごしてきたここから出ていくつもりはなかった。今七〇歳をはるかに越えた母が駐車をもう止めようとしよつちゆう言うのを何とか抑えているところだったから、そんな時に私が駐車を留守にすれば、本当に駐車場はつぶされて畑になっているかも知れないのだ。

次々と出される彼女の誘いに何度も断ってきた私は、いつも気分を悪くして心の中で怒った。だから昨日、私はとうとうユルヒのショッピングバッグを受け取るのを拒否した。しかし彼女はショッピングバッグを私に突き付けた。私は今は置く場所がないから止めてくれと叫んだ。彼女は意に介せず、ショッピングバッグの中にあるプレゼントを取り出し、包装を破った。その中には私が読めない外国語が書かれた化粧品セットが入っていて、一目で高価な商品と分かるものであった。

「四〇歳ぐらいになれば、いいものを使わなければいけないわよ。自分のしわくちやの顔、見なさいよ。あんたがいくらこんな境遇だといつても、そんな風に生きないで。」

「いいや。本当に大丈夫なんだから。出かけることもないし。」

「大丈夫なんて、何が大丈夫なの。遠慮なんてしないで、貰っておいで頂戴。人は結婚をして人生を終えるものなのよ。ずうつとこんな格好でいたなら、誰もあんたを相手にしないよ。一人

で生きていったら、誰にも知られずに死体で発見されるかも知れないのよ。」

ユルヒは靴や服をプレゼントする時もこんなことを言っていたのだが、私の確固たる拒絶のせいなのか更に一層ひどい言葉を吐き出したのである。そうすると昔彼女が口にした言葉を急に思い出し、その言葉が白っぽく覆われている霧をかき分けて次々と私の胸元をかすめて通り過ぎた。それは中学校の時だった。私はいつも昼食を一人で食べるのであったが、他のクラスだった彼女がやって来て言った。「あら可哀想にご飯を一人で食べてるのね。どうして誰もあんたと一緒に食べてあげないの？心配しないで。今日はずちが一緒に食べてあげるから。」私はご飯を一人で食べるのが悪いとか恥ずかしいか思っていたが、彼女の言葉を聞いた瞬間、惨めになり泣きたかった。私はその時の記憶を思い出し、気分を悪くした。一体どのように話をしたら、こんな要らぬお世話をやめてくれるのか、分からなかった。

「私は今が一番いいのよ。家族もいて、友達もいて、近所とも仲良くやっている。私は私の仕事というものもあるのだから、私はここで年取って人生を終えるつもりよ。それから本当に必要ないのだからそう言っているの。置くところもないし。」

私は彼女が気分を悪くすると思った。しかし彼女は人の言うことを全然聞かず、口元に微笑を浮かべたままであった。その彼女の表情は、私がショッピングバックでいっぱいの机の下に足を無理やり入れる時を思い出させ、私は鬱陶しく気まずい気分になった。それでも彼女は言った。

「アイゴ。分かった、分かったわよ。それでもこれは置いておいて頂戴。いくらネズミの穴ほ

どの小さな部屋だといつても、置くところがないというの？」

彼女はプレハブ小屋のドアを開けて中に入ってきた。彼女は小屋の中が思ったより広くて何でもあると感嘆しながら「置くところがないなんてウソだわ」と言つて私の背中を小突いた。ショッピングバッグが開けられもつせずそのまま机の下に積まれているのを見た彼女は一瞬溜め息をついたが、表情は変わらなかつた。彼女は机の前の壁に貼られている私の三枚の絵を見た。乾燥させるために貼つておいたのだが、今はすっかり乾いていた。次の絵を描かねばならないのに、彼女と再会してからは描く時間がなくなつてしまった。

「あんたが描いた絵なの？」

私はうなずき、一冊の本を取り出して手渡した。それは私が九年前の絵本公募展で当選して、最初に出した絵本だつた。彼女はそれを手に取つて見て、また元の場所に戻した。その横に置かれていた二冊の本にも私の名前が書かれているのだが、取り出して見ることはなかつた。

「こんな体で生きながら、何を信じてあんなにプライドを持っているのかと思つたら、信じているものがあるんだねえ。私のような人間とは一緒にやるのが嫌だということなんだねえ。あんたは子供の時からそうだった。人の好意をいとも簡単に拒絶して、追いついて惨めにさせたんだ。だから友達がいなかつたんだよ。あんたは覚えていないだろうね。うちはあんたが傷つくかと思つて言わなかつたのだけど、あんた、みんなから無視されていたんだよ。」

「そんなこと、私も知っているわよ。そうでなかつたなら、私がなぜこのようになったという

の？」

彼女はあきれたという表情で私を一度にらみ付けて、机の下のショッピングバッグを全て取り出して車に載せた。そうして後ろを振り返ることもなく帰って行った。駐車場は以前の平穩を取り戻した。私は自分が一瞬悪者になったような気分にもなったが、久しぶりに持った一人の時間を楽しむことが出来るようになり、もう彼女には来てほしくないと思った。

3

あれはいつの日のことだったか。昨日、ウイジン夫婦がやって来た。二人とも会社を退勤してから、ウイジンはチキンを、サンヒョクはビールを買って駐車場に現れた。久しぶりに駐車場に二台が入ってくれたので満足な気分だった。ウイジンは私には生まれて初めての友人らしい友人だ。少なくともユルヒに再会するまでは、彼女が唯一の友人だと思っていたのであった。

彼女と私を出会わせしたのは、私の不運があつたからだった。私に事故という不運がなかったなら頭を怪我することもなかったらうし、これぐらい頭が悪くなっていなかったらう。だから駐車場のような所で働くこともなかったらうし、ノートにこれほど一生懸命メモすることもなかったらう。ノートにメモをしていなかったなら、絵を描くことは決してなかったらうと思う。こんな不運の末に私が描いた絵が彼女をここに連れて来たのであり、彼女と友人となったの



私の人生において幸運だった。最初は不運と思っていたことが後日幸運に変わることはよくあることだと思えば、生きていることは幸いである。

それでも十分に商売が成り立っていた駐車場にお客さんが目に見えて減っていった時、母は晴れた日もあれば曇りの日もあるのだから大丈夫だと言ってくれたが、私は自分が災厄を持って来たように思って給料を貰うのを恐縮していた。そう思っただけからは、遅い時間に入って来るお客さんのために家に帰らず駐車場で過ごすようになった。何もすることもなくてボウツとしているのが嫌だったので、仕事の必要事項をメモしていたノートに、書きたいことを書いて絵を描いた。私が覚えている昔の出来事、家族との思い出、私が間違ったことや上手にやったこと、私がこのようになった経緯、家族に言っただけの言葉などを書いておき、その横に絵を描いた。朝市が開かれる時に利用するお客さんが帰り、それから夜までの時間がみんな自分で使えるようになってからは、絵の具と紙を買ってきて本格的に絵を描いた。毎日描いた小さな絵画はたくさん溜まっていったが、母がそれを捨てるのが惜しくて父のクリーニング店の壁に貼って自慢した。その絵を見た近所の人たちが、絵の才能をそのままにして置くのは勿体ないから私が何をどうしたら何かになるかと言うのだが、その「何」とか「どうしたら」とか「何か」が一体何なのか分からなかった。ある若い女の子のお客さんが絵本の公募展があると教えてくれるまでは、私は何をしたらいいのか、全く見当もつかなかったのである。私は処置に困った絵画を集めて公募展に応募し始めた。しかしいつも落選した。当選するなんて考えたこともなく、と行って他にすることもなかつ

たので、諦めないで年中行事のように応募した。

ウイジンは私が応募した絵本の原稿を持って、私を訪ねて来た。連絡先がないので住所を見て直接やって来たと言うのであるから、当選したのなら当然のことだと思つて一瞬喜んだ。しかしウイジンは、公募展を開催した出版社のサンヒョクという社員のガールフレンドいうだけで、私的な訪問だった。彼女は私の絵本原稿を偶然に見て、絵が気に入つて是非会つてみたかつたと言つて名刺を渡した。彼女は、オルナティブ・スペースの学芸員として西洋画を専攻していたが性に合はず、美術理論で修士学位を取つてそう年月が経つていないと自己紹介した。学芸員、専攻、大学院、修士……私は普段の生活でこんな言葉が口に出ることが全くなかったので、彼女が私とは違う種類の人間だと思つて恐縮した。ウイジンは後日言うには、サンヒョクが毎年ちよつと変わった絵本原稿を何篇か出す人がいて何だか怖いと言つていたという。それもそうで、その時はどのような話を作り、どのように文を書くのか、全く分からない時期だった。既に描いておいた絵を貼つておいて話を作ることもあつたし、話を作つてから絵を描くこともあつたが、いずれにしても初めも終わりもない話であつた。その上にその時は、私をこのような体にした人や自分を恨んでいた時期だったので、恐ろしいだけのことではあつただろう。彼女が見た絵本原稿というのは、自分を魚だと思ふ少女がもともと自分が何であつて何故そんな変な考えをするようになったのか知つて川に飛び込み本当の魚になる話だった。児童向け絵本にふさわしくない奇怪な内容だったが、エメラルド色の川を背景にした夢幻的な水彩画が印象的だったので私から話を聞きたい

と思つて訪ねて来たと言う。彼女は他の絵画も見せてくれるかと尋ねた。絵はあふれるくらいにたくさんあったので、机の下に積み上げていた絵を取り出して見せてやった。彼女は椅子に座つて絵をじっくりと見ると、これまでとは違う話を書いてみれば良い結果が得られるだろうと言つた。それからウイジンは退勤後時々私を訪ねて来て、絵画のこれからの方向について話し合つた。彼女は初めてやって来た時、私が自分と話をするのを嫌がつて無視すると思つたが、私が自分の言つたことを忘れないためにメモを取つていたと知つて驚いたという。そして何回も来ている自分をその度に忘れるぐらいに記憶力が悪いという事実にも驚き、また自分の名前や顔をさらに自分がした話を忘れないようこれほど必死になっている人は初めてだと感動したという。

結局私は次の年、ずっと応募してきた公募展に当選した。当選作は出版され、ウイジンが他のイラストレーターと私と一緒にした絵本の原画展を企画し、展示することになった。母は私が一前になり、これから別の人生を歩むことが出来ると言つて喜んだ。しかし私はプレハブ小屋で絵を描き始めたその日の晩にすでに別の世界に入つていたので、もう変わることはなかった。私はずっと駐車場で仕事をし、絵を描いた。どうせ生きるのにお金をたくさんかけることもないし、成功したいとか考えもしなかつたので、今以上のことを望まなかつた。これまでサンヒョクが独立して創業した出版社から二冊の本をさらに出した。ウイジンは自分がすべき仕事がなくなつたと言つたが、私が作る話を書いてもいい話なのかとか、話が合っているのかとか見てくれて、ファンクラブも運営した。ブログに、私の本に関する話やイラストと短い文章、本のレビューを時々

載せ、たまは作業近況を載せたりしたところ、そう多くはないが固定読者や本の検索を通して訪問する人がいるという。

ウイジンが訪ねて来た理由は、ちよつと前からブログに投稿され始めた悪意の匿名コメントのためであった。消去してもしばらくしてまた投稿するところをみると、誰かが悪意的にしているようで、私知っておかねばならないと言つてそのコメントを見せてくれた。

「ウソの話を作らないで、お前が犯した悪事について反省文を書け。お前の汚い噂を知っている。」

サンヒョクも、その時期に出版社への建議・提案の掲示板に何日間かにわたつて私を陥れるコメントが投稿されたと言つた。ブログのコメント投稿のような短い文章ではなく、ちよつと長文であった。私と中学高校の同窓だと明らかにした読者が、私が中学校から高校の頃に既婚の美術教師と不適切な交際を続けていたと書いた。その噂が広がると私がみんなから無視されるというイジメに遭つて、そのために自殺を図つたといひ、そのことで教師は逮捕され釈放されたが免職となり、妻とも離婚したとあつた。そして子供時代に一つの家庭を破壊した破廉恥な作家が子供たちを対象に本を書くことも腹立たしく、事実を明らかにしてそれなりの措置をしなければ不買運動を起こすとあつた。

「そのように詳しく読んであげる必要はないんじゃない？気分悪いように。」

ウイジンはサンヒョクが無神経だと怒つた。二人がしよつちゅう感情をぶつけ合うのは私のせ

いのように、私は何事もないと言った。実際に私は二人の言うことを聞いても何のことなのかさっぱり理解ができなかった。汚らしい噂、不適切な関係が具体的になのかを尋ねると、ウィジンがちよつと困りながら用心深く言った。

「ニュアンスで考えると、セックススキャンダルのことみたい。道理に合っていないけりやいけな。中学生なら、まだ子供でしょう。」

私はすぐに笑いが出て止まらなかった。その瞬間、四〇年間男の手を一度も握れなかった私に投じた汚らわしい冗談だと思つた。

「私が？本当に？私がそうしたんだと？」

私の笑いに安心したのか、ウィジン夫婦もつられて笑つた。笑つてみたら、昔どこかで嗅いだことのある臭いがすつと鼻についた。それは外から入ってきたのではなく、私の体の中に溜まっていたものが溢れ出て、あの頃の記憶を呼び起こす臭いだった。その臭いは生温かくて生臭い体臭だったが、柔らかく穏やかな感じがした。それは学校の先生の白くて細身の顔を私の傍まで呼んで来た。そして先生の首筋にぶつぶつと噴き出た汗やがっちりした肩、広い背中が一つ一つよみがえつてきた。私の頬に触れる彼の柔らかい手が思い浮かんで来た時、私はもうこれ以上笑うことが出来なかった。彼の優しい声と彼の車の中で聞いた「野菊」の歌が耳に聞こえてくるのだ。まるで別れた昔の愛を思い出す時のように心が揺れ、胸を締め付けた。むしろ記憶から完全に消えてしまったなら心も安らかになるだろうに、おぼろげな記憶のために絶対にそんなこと

はないと堂々と言うことは出来なかった。私とユルヒの記憶があれほどに違うのだから、本当に私はどれ程違う人間だったのか、知るすべはなかった。

「同じ時期に投稿されたことから考えると同一人物のようだけど、何故そのようなことをするのかしら。恨みがある人のようで、気にかかったので話しておくわよ。内容はもう言うこともないでしょう。胸にいつまでも置いておかないようにね。」

思い起こす記憶をウイジンに到底話出来なかったが、そんなことをしたことがないと言うことも出来なかった。

「実は私もよく分からないの。覚えていないかも知れないし。自分を信じていなければね。」  
ウイジンは呆れたように言った。

「私があんたを十年近く見てきたでしょう？あんたはそんな人間じゃない。あんたが生きてきたこれまでの歲月自体がそれを証明しているのに、何を言ってるの？あんたも自分を信じて。これは単純な荒らし投稿だよ。頭が痛くなるから、取りあえず消去していくね。あんたもどんな方法を使っても消してしまいなさい。このことでこれ以上頭が痛くなるなら、警察に届けましよう。」

ウイジンは私のノートを広げて、鉛筆立てからマーカーペンを取り出した。

「あんたは心配しないで、絵でも描きなさい。すぐに描きなさい。むしろくしゃしたら、これを広げて読むのよ。思い出せないなら何遍も覚えるのよ。」

『私はそんな人間ではない。』  
大きく太い字でノートいっぱい書いておいた。彼女の字は丸く、字の一画一画の端がシャープな感じを与えた。私はその一文を軽快に読んでみようとしたが、口から出てこなかった。私はその言葉が信じられなかったのである。

4

あれはいつの日のことだったか。昨日、昔住んでいた家に行つて来た。行つて来たと言うよりも、通り過ぎたと言う方が正しい。私はユルヒの車に乗つて、どこかに行く道であった。その日はユルヒが久しぶりに訪ねて来て、ごちやごちや言わずに車に乗れと言つた。何のために？と聞くと、彼女は助手席側のドアを開け、私をじつと見て言つた。

「今日の日当は私が出すから、黙つて乗りなよ。先生の噂、気にかかるってね？」

彼女は私の方から電話でそのことを聞いてきたのに、また電話したこと自体を忘れていていると言つて叱りつけた。私はプレハブ小屋の窓を閉めドアの鍵をかけてから、彼女の車に乗つた。私はせっぱつまつた気持ちで尋ねた。

「あのう、私、美術の先生と変な噂があつたというけど、本当なの？」

「変な噂があつたということが本当かということ？それとも、その変な噂の中身が本当かとい

うことなの？」

「どちらも。あの時私に話してくれなかったでしょう？私、初めて聞いた。」

「ああ、いつかは話すわよ。けれど詳しいことは分らないし。それに噂が一つ二つということもないし、そういううちに消えるものだし。そんなこと、今まで誰が覚えているというの。」

「その噂、信じられる？とんでもないと思う？」

「うちこそ、二人の間に何があつたのか知らないわよ。噂がどんなものであれ、あんたでなければいいんじゃない？それに、あの変態先生にやられたのは、一人や二人じゃないのよ。うちらが懲らしめたのだから、気にしないで。」

私は彼女の言葉に少なからず当惑した。あの先生はそんな人間ではないと言いたいのを辛うじて我慢した。彼女が言う「うちら」とは一体誰なのか分からないので聞いてみたが、「いる」という言葉だけで一貫した。ユルヒの車は大通りに向かった。五〇mほど行けば大通りだが、私はこれまで大通りに行くことがほとんどなかった。ユルヒは私が聞くことに答えないで、話題を変えた。

「あの道の向こう側の市場にも行ったことがないの？いったい駐車場の外に出たことがあるの？」

ユルヒは優しい言葉使いで言ったが、私は気分を悪くした。私も市場くらいは行ったことがある。家族も誰も訪ねて来ない私を十カ月間世話してくれた、今私が「お母さん」と呼ぶ介護士に



連れられて市内に来た時に、その市場に行ったのだった。病院からの帰り道で布団と家財道具を  
買うために立ち寄った市場は、ちよつと奥に入り込んだ商店の建物と道端の露店がごちゃごちゃ  
に入り混じつて汚かった。通り過ぎるオートバイと荷物担ぎたちが、びっこを引いて動きが鈍い  
私に「早くどけ」と大声で怒鳴り、商人たちは値段だけを聞いて通り過ぎる母の後ろから「値  
打ちの分からん奴！ からかつてるのか！」と悪態をついた。私はそんな阿鼻叫喚の世界に裸で  
放り投げられたようで悲しくなり、怖かった。母は「もうこんな所には来ないようにしましょう、  
悪口は聞かないで、まともな人だけを見るようにしましょう」と言つて、私の手をぎゅつと握り、  
市場から出てすぐに道を渡つた。その後、再びその市場に行くことはなかった。大通りの向こう  
側には遠くからも一目で見える高いビルディングとアーケードがあり、衣類ショッピングセンタ  
ーの横には話だけ聞いていた巨大な立体駐車場があつた。この駐車場に入ろうとする自動車が道  
にはみ出してずらつと並んでいたもので、その一帯は交通渋滞をきたしていた。その光景を見て、  
自分の駐車場はもう終わりだと思つた。混雑する都心を抜け出てトンネルに入った車はそのまま  
走つて反対側の出口を出た。ユルヒは横側の窓の外を指差して言つた。

「あそこが、あんたが住んでいたアパートよ。覚えてる？」

アパートは年月の経過とともに老朽化してその場所に建つていたが、その間にうつそうとした  
木々に囲まれ、まるで自然の山のように見えた。私はそのアパートで祖父母や叔母と一緒に暮ら  
した。私がそこにいたのは三歳の頃、交通事故で両親を一度に亡くしてからであつた。祖父母と

の生活はいつも静かに過ごしていたが、ちょっとした楽しみがあった。祖父は私を図書館や本屋に連れて行くのを好んだ。祖父の横に座って本を読んでいる時、何か分からないことを聞くと、祖父はすぐには答えてくれないで逆に私に変な質問をした。祖父の質問に答えていくと、結局私の質問の答えに繋がるのであったが、からかわれているようで私は口をとがらせた。そして甘いおやつを買ってくれると直ぐに気分を取り直してへへと笑う私を連れて、祖父は都心を散歩しながら昔話をしてくれた。祖母は季節の変わり目になると私を百貨店に連れて行って、新しく出たワンピースや下着を買ってくれた。ショッピングを終えてから、祖父と一緒に百貨店の食堂街で日本料理の豚カツと手打ち蕎麦を食べ、封切のホームドラマ映画を見たり、公園を散歩した。祖母は私と散歩するのを楽しみにしていた。毎日、明け方に裏山に登る時も私を連れて行くようになったが、私は寝入って起きれなかった。アパートの後ろ側は裏山に面していて、私の部屋やベランダの窓際に立つと散策路に続く道が見えた。寝坊してようやく目が覚め窓の外を見ると、散策路を歩くお祖父さんとお祖母さんが私に向かって手を振ってくれたことを覚えている。私はどこにいても、いつもお祖父さんやお祖母さんと繋がっている気持ちであった。そのアパートで過ごした時期は私の人生でこれ以上ない最高の時間であったから、忘れることは出来なかった。「結局は一緒に裏山に行けなかった」と独り言を言いたいのをぐつとこらえ、「結局」という言葉は本当に嫌な単語だと思ったのだった。

「あんたの家、一番外側の棟の五階だったでしょ。ところで今になって言う話だけど、ずっと

気になっていたんよ。あの時、五階ということ、覚えていない？」

「あの時？」

「あんたが飛び降り事件を起こした時のことよ。これも覚えてないのかしら？ こうなりたいとは思っていないかつたはずなのに。本当にダメだったねえ。」

私は彼女が何を聞いているのか理解できたが、私を慰勞しているのか、それともからかっているのか、分からなかつた。あの時高校三年だつた私は、五月一日の朝早く洗濯物のスリップとストッキングを取り返もうとベランダに出た時、不登校だけでなく今の苦痛を根本的に解決する簡単な方法を思い付いた。ベランダ外側の網戸を開け、スリップを頭に被つて安全柵の外に腰を出すまで一瞬のことだつた。ベランダの外はのどかな春の日で、アパートの裏庭には誰もいなかった。いつでも死ぬると思うと、その日がちょうど良い日だと思つた。深く考える必要もなかつた。

私がつまらなく落ち着いた性格だつたら、あるいは体が不自由でなかつたなら、ここは五階だから失敗するかも知れないと思つておそろくそのままエレベーターに乗つて屋上に上つていただろう。屋上に上り切る前に心変わりをしてまた下に降りたかも知れないが、一旦屋上に上つたならば何はともあれ生を終えるつもりであつたから、今のようにならなかつたのである。

一時このような体で生きていることが恨めしく思つたこともあつたが、今はそうでない。とにかく生きているのだから、このアパートにまた来る日もあるのではないかと思つてきた。私はユルヒの問いに何と答えればいいのか分からず「うん」と答えたが、彼女がはつきりとした返事を期

待して聞いたのではなかった。

「うちはこの町に本当に久しぶりに来たわ。うちの両親はだいぶ前に引越したんよ。あなたの家族はまだここに暮らしているの？」

私が事故の後に家に帰ることが出来なかったとユルヒに言ったのか思い出せなかったが、また口に出すのが嫌で返事しなかった。

「これは、ごめん。勘当されたと言っていたね。」

ユルヒはだいぶ経ってから思い出したように言った。それを聞いて、コンセントからプラグが抜けているのを後になって気付いたような気分だった。病院に入院している十カ月以上の間、祖母は一度も訪ねて来ず、祖父がたった一回訪ねて来ただけだった。一週間ほど意識がなかったが、意識が戻ると祖父がベッドの横に座っていた。その時私はそこがどこなのか、どんなことで寝ているのか、分からなかった。祖父は私に向かって「死ぬ勇気があるなら、その勇気で生きなければ」と泣き叫びながら言うのを聞いて、私が何か大変なことをしでかしたようだった。記憶が戻らないうえに、何も考えられなかった状態だったが、祖父言うことは絶対に間違っていると思つた。それは考えというよりも、反射に近かった。分単位、秒単位で勇気をひねり出して人生を耐えることと、一度の勇気ですべてを終わらせてしまうことを等価に置くことは、とんでもない間違いと思つた。しかし私がなぜそんな考えをするようになったのか、全く思い出せなかった。ぼんやり眺めている私を見ながら泣いていた祖父は、病室を出てもう二度と訪ねて来なかった。退

院する時にやって来た人は叔母だけだった。叔母は私の衣服などを入れた大型旅行カバンと私の名前で作った通帳を渡して、「これから自分で生きろ」と言った。通帳には古びたワンルームマンションを借りるチョンセ（保証金）程度のお金が入っていた。叔母は「自分はやるべきはやった」と、ビツクリするほどの金額が書かれた病院の領収証を見せた。叔母は「私のせいで家族が散り散りになり、その上に障害まで負ったお前を扶養できないのだから家から出て行け」と言った。私が家族から捨てられるくらいの間違いを犯したのか、自分で理解が出来なかった。なぜそんなことをしたのかと一言も聞いてこない家族を恨みはしたが、私が大きな過ちを犯したようなので叔母の言う通りにしなければならぬと思った。それでも「祖母と祖父に許しを願って最後の挨拶でもしたい」と言うと、叔母は「このように滅茶苦茶なつたお前の姿を誰も見たがらない」と言った。私は家に帰らず、家族と再び会うことはなかった。その約束を守ることが謝罪だと思つたのだが、果たしてうまくやっていけるのか分からない。そんな昔のことを思い出すと、私はちよつと車から降りてその家に行きたかつたのだが、今訪ねて行ってはいけぬと思ひ、次の機会にすることにした。

私のノートには、昔私が暮らしていたアパートと裏山の風景が描かれているだけで、ユルヒと話した内容はここまでしか書かれていない。苦痛の記憶を思い出すことだけでも辛く、メモをし続けることが出来なかつたのだろうか。ユルヒと私がどこに行ったのかも書いておかなかつたので忘れた。先生に会つたのではないかと思つたが、やはりそれはなかつたようだ。なぜなら先生

を忘れるわけがないのに、書くことが何もなかったのだから。頭がさらに悪くなるような気分だった。

5

昨日は中学校の同窓生たちが訪ねて来た。昼食にキムチ焼きを持って来た母が帰ろうとすると、ところに、駐車場に車三台が列になって入って来た。母はお客さんが続けざまに入って来ることもあるんだなあと、言っただけで帰ったが、私は何か用事があるかと思っただけで、女性四人が車から降りて私に親しい素振りをした時も、私はお客さんだと思っただけで、彼女らは自分たちを忘れていてというのがウソだと思っただけで、そうでなければ余りに不思議だと思っただけで、か、「本当に分からないの？」と何度も聞き返した。彼女らは私がユルヒと一緒に自分らの集まりに来たことがあると言う。しかし私はノートをひっくり返して探してみてもそんな記録はなかったのだが、よくよく考えてみるとそういうこともあったのかも知れない。彼女らの顔は初対面と思っただけに馴染みのない顔だった。彼女らのうち何人かは皮膚が伸びきったおばちゃん、何人かは若い格好をしていても年齢を誤魔化すことは出来ない顔だった。しかしみんな私より若く見えた。「この二〇年の間、あんた以外の子とはみんな会って」とユルヒが言ったことを思い出した。「あんた以外」という言葉は、それまでは私がその仲間に加わっていたという話のよう

に聞こえたが、私はそんな友達がいたことを覚えていなかった。彼女らはみんなと再会した時、私がいきなり初対面のように振る舞ったので当惑して話が十分に出来なかったのもつと話をしようと訪ねて来たと言う。私は彼女らにまた自己紹介をお願いして、ノートに彼女らの顔を描き、名前を書いた。ミヨン、チヨン、ソンミ、イエスク。私は彼女らのうちの何人かの名前を覚えていた。しかし頭の中で覚えているその名前の人物が目の前の彼女のことなのか、分からなかった。女性たちの名前はほとんど似たり寄ったりに思える。

私が入院している間、似たり寄ったりの名前のたくさんの女の子が病室に来了。クラスの子らは私が昏睡状態の時にみんな来てたと言う。彼女らはノートに短いメモを残していった。みんな「ごめんなさい」「すぐに元気になって学校に行こう」という文だった。私が意識を取り戻してからもクラスの子らの訪問は絶えなかった。入院している間、私を知っている子らは大部分訪ねて来た。私は同じ系列の中学校から高校に進学したので、ほとんどの全校生が来たことになる。彼女らは私の手を握り、大声で泣いたり、ひざまずいて祈った。私は彼女らが何を「すみません」と何度も言うのか分からなかった。彼女らは自分たちのせいで私が投身したと思っているようだった。実は私は何故そのような恐ろしいことをしたのか、自分でも全く理解できなかったし、記憶もなかった。どうやら彼女らは自分たちが学校で私をのけ者にしてイジメて、私がそのことで泣いて抗議していたので、謝罪に来たようだった。しかし私は何も思い出さないので、彼女らの謝罪は私の心に響かなかった。私は彼女らがしょっちゅう来てひたすら泣くので鬱陶しく、「分か

った」「みんな許す」「大丈夫だ」という言葉を機械的にするだけだった。泣きながら入って来る彼女らは私の言葉を聞いて笑い顔で帰っていくのだが、私は彼女らのきれいな足と元気な足取りを見ると、我慢できなかった。彼女らは私に許されて幸せに生きていくのに、私は彼女らが病室のカーテンの後ろで大声で言っていた「不具者」になって苦痛の人生を生きていくのだと思うと、辛かった。

そんな昔を思い出しながら、彼女らがなぜ今私を訪ねて来たのかその理由がよく分からなかったが、先生について何か聞くことが出来るようなので、取りあえず座れるものを取り出して席をつくってやった。彼女らと私の五人は、駐車した車で狭くなった駐車場の空間で車座になって話し合った。久しぶりに会う友達との話は昔のことばかりだった。私の記憶に話、あるいは私にはどうでもいい話であった。彼女らは話を美しく潤色していたが、その話は私の頭の中で記憶を呼び起こし、鮮明に再生した。

私と一緒に美術クラスだったジョンは学校代表として写生大会に出た話をした。しかし彼女についての私の記憶では、彼女は筆を洗った水で私の絵と服にこぼし、今度は服をぬぐってあげると言ってその絵を服にこすった。水に濡れた絵は破れてしまい、私の服は絵の具でぐちゃぐちゃになって汚れた。また私と同じアパートに住んでいたミヨンとイエスクは、私と一緒に学校に通っていた仲だと言った。そして二人は、私が米屋の前に置かれてい容器をひっくり返し、中に入っていた大豆と小豆がごちゃ混ぜになったという話をして笑った。しかし私はその時に私の背中



を押したイエスキの小さな手を明瞭に覚えており、そして自分らは塾に行かねばならないからと言つて家に帰つてしまい、私が日が暮れるまで一人で大豆と小豆を選び分けた事実を忘れることが出来ない。また口をつぐんだまま何もしゃべらないソシミは、その時はまだ犯人だとは明らかになつていかなかったが、体育の時間が終わつてから私の制服をハサミで切つてしまい、靴をゴミ焼却場で焼いた。そしてまたジョンとイエスキは掃除の時間に二人でゴミ箱のゴミを捨てに、洗い場で雑巾を洗っている私の横を通り過ぎる時、驚くようなおしやべりをした。「雑巾を洗っているよ」「後ろから見ても、女の子かどうかわく分らないんだつて。」私は投身事件後に聞いた「かたわの女」という言葉より、事件前に聞いた「汚ならしい女」という言葉ははるかに数が多かつた。制服のブラウスが四着、スカートが三着持つていて、毎日洗い糊をきかせてアイロンかけて着ているのに、何故そんなことを言うのが理解できなかつた。その時は何を言っているのか分からなかつたが、そんな噂が立っていることを知つて初めてこれまで私に起きていた出来事が理解できた。何人かに唾を吐きかけられたこと、誰かの足に引つかかつて転んだこと、机の引き出しに牛乳がこぼされていたことなどの出来事が寒気を感じながら次々と思ひ出し、その場面が今の私の目の前で再生した。その時の辛くて悲惨な心が生々しく蘇つて今の私の胸を深く突き刺し、そしてそんな記憶が一つになつて私の頭を殴りつけた。

私はその頃いつも死にたいと思つていたが、私の顔と頭に唾を吐いた子を殺す前には絶対に一人では死なないと誓つた。いつかきつと、あいつらが何も出来ない人間にしてやると決心した。

その時に自分の机の前にその子らの名前を書いて貼っておいたのだが、今はその名前が思い出せない。私は歯を食いしばって中学・高校の六年間を送った。同じ系列の高校に進学したので、新入生が入って来てイジメは少しだけ減った。中学校時代に比べれば何とか我慢できて、卒業までもう少しという時に何故あのようなことしたのか今の私には本当に理解できなかった。私は四人に美術の先生について尋ねた。彼女は前に会った時はユルヒがいて全てを話しすることが出来ず、だから今訪ねて来たのだと言った。ずっと黙っていたソンミは、次のように話を始めた。

「うちらが先生の人生を台無しにしたのよ。ユルヒは先生が罪を償っていないと言っているけど、うちらにはあの子と違うのよ。うちは罪責感で宗教まで持ったわ。」

ソンミは涙が溢れ出そうだった。私は彼女が何を言っているのか聞き取れなかった。みんなは私が入院している時に起きた出来事を話してくれた。

事件が起きた翌日、祖父が中学校に先生を訪ねて行って、拳を振り上げた話が高校にまで広がっていた。先生が拘束されて法廷に立った時、証言をしたのがこの四人とユルヒだった。みんなは先生が自分の体を触り、服の中をまさぐり、汚ならしいことをしたとウソの証言をした。ユルヒは先生と私がモーターから出てくるところや、先生の車の中でキスするのを見たと陳述し、先生が自分にもセクハラしたと証言した。しかし先生のアリバイが証明され、チョンが陳述を翻したために無罪で放免された。

「ユルヒは本当にやられたと言っていたけど、あいつがみんなで証言したら刑務所に送れると

言つて、私たちが口裏を合わせたのよ。それでもジョンが私たちを救つてくれたのよ、そうでなかつたなら、もつと大きな間違いを犯すところだったわ。先生は学校を辞め、離婚もしたのよ。何か弁解したらよかつたんだけど、何も言わないからかえつて疑われたようなの。その時は本当に先生とあんたはそんな仲だったのかと疑つていたんだけど、長年先生を見てきたから、そんな人じゃない。私たちが余りに子供で無知だったから、善悪の区別もつかなかつたのよ。」

ソンミは今にも泣きそうな顔だった。その横でじつと黙つていたジョンが小さな声で言った。「私は中学の時、その噂を信じたわ。ユルヒが本当に見たと言つて、他の子らも学校の外で二人が一緒にいるのを見たと言うので信じたわ。だからあんたをイジメたの。ここにいるみんなもイジメたし、他の子らもイジメたのよ。その噂がとんでもないものだったのよ。あんたがあのようになつてからお祖父さんが中学校まで訪ねて行つて絶対に許せないと怒つたのは当たり前ですよ。先生はあんたが高校に行つても付き合つていたという噂だったでしょ。私も先生が好きだったから裏切られたと思つたのよ。けれど、なかつたことをウソ言つて、あつたことにしたのが怖くてねえ。」

はにかみ屋の少女のようなチョンは、今は中年おばさんになつたが、顔を赤くして言つた。

「あんたのお祖母さんが亡くなつて、お祖父さんが非常に辛かつたようね。噂だけで告訴は出来ないし、あんたは入院しているし、先生は何も言わないし……先生が責任を取らないならお祖父さんも亡くなるところだったわ。毎日学校を訪ねて来られたけど、今にも死んでしまひそうな

様子だった。私たちはウソでも助けてあげたかった。実際に、あんたが死のうとしたこと、私たちのせいでないことを証明したかったのよ。」

「お祖母さんが亡くなったって。どういうこと？いつ？」

私は祖母が亡くなったということ聞いて驚き、他のことが耳に入らなかった。お前らのせいで死のうとしたのではないと言おうとしたが、口を開けることが出来なかった。みんなは急に口をつぐみ、慌てた顔で私をのぞき見た。

「知らなかったんだね。こんな風に知ったのなら、どう言えばいいのかしら。本当にごめんね。

あんたがあんなことになって一カ月も経っていない時だった。うちの母親があんたの隣の家のおばさんと一緒にスイミングに行っていたので、その時に知ったのよ。心臓麻痺で亡くなったって。」

イエスクが気の毒がるように言った。私は余りに驚いて、涙すら出てこなかった。その間、祖母は年取って病気したのかどうか知らなくても、相変わらずに生きておられると信じていたが、二十年前に亡くなっていたとは……。どう言えばいいのか分からなかった。病院に一度も来てくれなかったと恨んでいたことを思い出すと、心が粉々に砕けるようだった。ミヨンが私をとんとんと軽く叩きながら、手を握った。

「サンヒョン、本当にごめんね。私たちがもつと前にあんたを訪ねてごめんと言わなければならなかったのに。私たちにも暮らしがあつて、このように時間が経ってしまったの。私たち、人間じゃないわね。」

「そうじゃないわ。気にしないで。」

目を赤く充血させながら何とか涙を我慢する彼女らにかけられる言葉がなく、二〇年前に病院でみんなに言つてやった空虚な言葉を繰り返すだけだった。そして彼女らに私が描いた絵本を分けてやった。彼女らは私が作家になった事実を知らないようだった。私は自分が作った童話を彼女らの子供たちに聞かせてやることお願いし、みんなが誤解しているような人間ではないことを知つてほしいと思つた。

6

あれはいつ日のことだったか。昨日は誰も訪ねて来なかつた。長い間絵を描くことが出来なかつたので、水彩画用紙の束の一番上の紙には白っぽいほこりが被り、壁に貼つておいた絵は干からびてしわくちゃになつていた。私はそんな紙や絵をゴミ箱に捨て、新しい紙を広げた。ノートに目を通しながら何を描くか考えている時に、中学校の同窓であつた彼女らが教えてくれたあの先生の電話番号と店の名前を見つけた。

先生は学校を辞めて何年間は塾講師の仕事を転々としてから、郊外に小さなインテリア店を開いたという。店の名前が「素敵なインテリアショップ」で、壁紙貼り・オンドル床貼り・塗装を専門にする小さな店だった。先生は従業員も置かずに自分一人で仕事をし、独り暮らしをしてい

るといふ。同窓の彼女らは、今先生は学校の教師だったという痕すらなく、その全てのことがみんな自分たちのせいだと呟いた。彼女らは先生の人生が滅茶苦茶になったという意味で言ったよ  
うだが、私は自分の人生が滅茶苦茶ではなかったのだから、それと同じように先生の人生も滅茶  
苦茶ではないだろうと思つた。私は人生というのは、誰か他人によつてそう簡単に滅茶苦茶にな  
るものではないことを分かつていたのだが、それを彼女らに話してやつても理解できないだろう  
と思つたので言わなかつた。彼女らは先生とよく食事をするので、この次には私も一緒に行こう  
と言つた。私は嫌だと言つて断つた。

私は新しい紙と万年筆を取り出し、ペンキを塗る男の後姿を親指の大きさに描いた。そして何  
もない空間に廢材を集めて家を建て、庭を作る男の話を書こうとした。今は誰にとつてもどうつ  
ていうこともない普通の人間であるが、昔ある時にある人を助けた男の話である。彼の人生をど  
のように描いたらいいか考えたが、一人の人間が過ごす非常に長い歳月を想像することは不可能  
だ。誰かが今の私を見てそれまで私が生きてきた歳月と私の不幸を想像できないのと同じよう  
に、彼の人生もやはり想像できないのだ。先生にその間にどんな気持ちで生きてきたのか、今は  
元氣でいるのか、直接会つて尋ねない限り見当もつかないと思つた。

私は店なのか自宅なのか分からない電話番号の数字のボタンを何も考えずに押した。一度かけ  
て出てこないなら、二度とかけるつもりはなかつた。呼び出し音が四回鳴つた時、「カウディ  
ンテリアです」という声が聞こえてきた。男であることは間違いないが、先生なのかどうかはつ

きり分からなかった。他に言うことが思い浮かばず「サンヒョンです」と言うと、相手方から何の返事もなかった。しばらく受話器を持って待っていたが、間違っかけてたかと思つて切ろうとした時、しわがれて元氣のない声で「無事でいたか、元氣か」という声が聞いてきた。私は「はい。無事です」と答えた。発音が明快でなく、間違つて聞こえたかと思つて、今度ははっきりとした声で「元氣です」と言った。彼は何も言わず、しばらくしてから言った。

「すまなかつた。いつか必ずこれを言いたかつた。噂が怖くてお前を避けるなんてことをしていなかつたら、お前があんなことにならなかつたのに。全ては私のせいで、どんな罰でも受けようと思つていたのだが、結局は出来なかつた。一生謝罪する気持ちで生きている。」

私は彼が何を「すまない」と言うのか、分からなかつた。久しぶりに会えば「すまない」と言うのが流行なのか、人に会うたびに「すまない」とか、「みんな自分のせいで私がこんなことになつた」と言うが、そんな言葉は私には特に感動するものではなかつた。

「いつのことをおっしゃっているのですか。もう昔のことだし、私はここでちゃんと生きているのに、何をおっしゃっているのですか。先生には何の関係もないことですよ。そんな気持ちはお捨てになつて、お幸せにお過ごしください。」

私は電話を切つた。あの時に先生と一緒に聞いた音楽は今も耳元で聞こえ、二人で皮を剥いて食べたオレンジの匂いは今も私の鼻をくすぐるのに、あの時の先生はもういないのだ。「避ける」という単語は、過去に多くの人が私に見せつけた冷たい顔と私に背を向けた後ろ姿の記憶を一つ

一つ呼び起こした。私はその時の辛かった気分を思い出し、息が出来ないくらいに心臓が高鳴った。

誰も話しをしてくれず、誰も笑ってくれなかった中学校の頃、私に言葉をかけてくれたのはユルヒと先生だけだった。「あんたに声をかけると他の子らが嫌がるのよ。もう学校では知り合いじゃないふりをしてくれる？」とユルヒが言ったことと、その話を聞いた先生が涙を流して彼女を叱ったことを思い出した。「二人が寝たというのか？そうでないのなら、お前があんな言い方をするものじゃないだろう。」と言っていたことが思い出された。その時、その言葉がどんな意味なのか分からなかった。先生は私に「時間が経てばイジメや苦痛が結局は財産になる」と言い、「いつかはよくなっていく」と言ってくれた。先生と話をすると、私が経てきた苦痛が早い速度で消えていくように感じられて、そのことだけで生きていくことが出来た。しかし中三の夏が始まる前に先生が急に私を無視し始めた。目も合わさず、言葉もかけてくれず、遠くから私を見るとすぐに避けることが何度もあった。中学校の残りの学期は、先生が私に与えた苦痛が非常に大きかったので、かえって他の子らから受けるイジメなんかは何でもないように感じられた。高校になって私は知らない所へむやみにバスに乗って行って徘徊したものだだったが、意外な場所で先生と偶然に出会った。頭をうつむけて急ぎ足で歩く私に向かってクラクションが鳴った。自動車の窓から先生が私を見て笑っていた。久しぶりに見る笑い顔で安心した。彼は私を車に乗せ、以前のようになんか「元気でやっているのか」と尋ねてくれた。もう二度とは聞けない優しい言葉を聞く



と、胸がじんとなつて涙がにじんだ。私は「今はもつと悪くなつてゐる、これからも良くなることはないようだ」と言つて声を出して泣いてしまった。先生は私を黙つて静かに抱いた。そうすると、どちらが先に動いたのか分からないが、口を合わせた。先生はあわてて私の体を押しやろうとしたが、私は先生の胸の深くまで体を入れて離れまいと必死になつた。私は先生に吸い取られてこの世から消えてしまいたいと思つた。先生は辛うじて私を押しつけ、頬をぶつた。私はキスをしたかつたのではなく、先生の温かさのなかで死にたかつたのだが、その方法が分からなかつただけだつた。私はドアを開けて飛び出し、通りを走つた。泣くまいと目をかつと見開いたが、それでも涙があふれ出た。「お前とまた巻き込まれるのは困るから、自分の名前を口に出さずに互いに知らない振りをしよう」という彼の最後の言葉が私の耳から離れなかつた。泣いてゐる顔で家に帰つたら祖母と祖父に心配をかけると思つて、涙を乾かそうと家に向かつてバスにも乗らずに走つた。全身が汗でぐしょぐしょになり、髪の毛から汗がたらたらと落ちるまで走つても涙は乾かず、日が落ちてからもしばらくの間裏山の散策路を走つた。その日のことだつたらうか？夜遅く家に帰ると祖母と祖父が寝ており、叔母だけが勉強で起きていた。叔母は汗に濡れてぼつとしている顔で帰つて来た私を風呂場に押し込んだ。

「ユルヒから聞いて、みんな知つたわよ。お年寄りをがっかりさせたらダメ。あれをしたいのなら、大人になつてからやること。しばらく口を聞かないようにするけど、これからもあれをするのだつたら、家から追い出すわよ。」

「あれ」とは何なのか聞こうとしたが、その前に叔母はドアを閉めた。イジメられていることを叔母が知ってしまったんだなあと思うと自分が惨めな気分になっただけで、叔母が聞いたという話が一体何なのか想像できなかった。

時間を飛び越えて入り込む否定的感情は私の頭の中を何度も打ちのめした。絶え間なく飛び込んでくる感情と記憶の破片に叩かれた私の頭がぼんぼんに腫れあがり、直ぐにでも破裂しそうに痛かった。このままだったら死ぬかもしれないと思い、プレハブ小屋の外に出て駐車場の中をぐるぐると歩き回った。入り口に積まれたゴミの山が悪臭を放ちながら中に入り込んでいても、暗い日陰であっても、この駐車場があるということが私を安心させてくれた。しばらく回ると、腫れあがっていた頭の中が鎮まった。私は誰でもいいから会ってあの時の話をしたかった。ユルヒでも訪ねて来てくれればいいのに、彼女は来なくなって大分日にちが経ち、電話もよこさなくなつた。ウイジンは必要ならいつでも電話してくれと言っていたが、彼女は昔の私のことを全く知らないのです、話をしてもおそらく分かってくれないだろう。

昔のことを知っている人が必要だ。何よりも家族に会いたかった。罪責感のために叔母の最後の頼みを聞いたのが間違이었다。殴られて追い出されても、家にいなければならなかった。そうしたなら、ずっと後になって祖母の死を聞くなんてことはなかったはずだ。祖母が亡くなつていたという事実が信じられなかった。この二十年間、私には祖母は生きている存在だった。アパートで祖父と一緒に本を読み、テレビを見て、散歩に出かけているものと思っていた。祖母が私

を追い出したのではないことは分かったが、孫を一度も訪ねて来ない薄情な祖母だとしても生きていてほしかった。祖母に会いたい。祖母より三歳年上の祖父は元気なのか気になった。そして今もそこで暮らしておられるのだろうか。家族に会いたいと書いたノートを手を持ち、大通りに出てタクシーに乗った。

二十年前までアパートの中に入ろうとすると、警備員が私をじっと見た。五〇三号ですと言うと、警備員は首を傾げたが、止めなかった。一階の郵便受けが空になっていて、家族がそこに暮らしているのかどうもおか確認できなかった。私はエレベーターに乗り、五階で降りた。鉄製の玄関扉は何の表情も温かみもなく、それだけを見ると誰が暮らしているのか全く推測がつかなかった。私は呼び鈴を押そうかどうかどうしようか何度もためらった末、階段に座った。そうしているうちに、もし家の人が出てくれば、どのように挨拶しなければならぬか悩んだ。偶然に通っただけです、通り過ぎるところです、そんな言い訳でも言おうかと悩んだが、よく考えてみるとあきれた言葉で、自分でもちよつと笑った。

隣の家の玄関扉には子供用自転車が置かれていた。ひよつとして自分の家に置かれていたのが、押されていたのかも知れないと思った。祖父も私と同じように体が不自由ではないだろうか、祖父と叔母は一緒に暮らしているのだろうか、叔母は結婚したのだろうか、結婚したのなら子供がいるだろう。私とは従兄弟になるが、顔も知らないで育ったのだろうか。私は階段に座ってちよつと居眠りしたり、階段を上ったり下りたりした。ノートを広げて、家族らと話を交わした

いと書き込んできた文を読んだ。それはたくさんさんの量であったが、それをみんな読んでしまっても両方の玄関扉は一度も開かなかつた。考えてみれば、ノートに書いておいた文章はとんでもない誤解に基づいているので、役に立たないものばかりだ。私はノートに新しい文章を書いた。その間の一部始終を全て盛り込もうとすると一ページでは足りなかつたが、読み返してみると、やはりつまらない話であつた。何を書くにしても、それが過去を取り戻せると思つたので、ノートのページを引き破いて大きな字で一文を書き、玄関扉の隙間に差し込んだ。

「私はそんな人間ではありません。けれども本当にすみませんでした。全てのことが懐かしいです。ずうつと元気でいらつしやってください。サンヒョン。」

駐車場に戻ると、日がちょうど暮れていく時であつた。暗くなつていく駐車場の床面に母が古新聞を敷いて座っており、戻つて来た私を見て、飛びついて抱き寄せた。「どこへ行つていたの、ずつと待つていたのよ」と言いながら喜んだ。母は、昨日警察がやつて来て私について尋ねたという。障害者をこき使つてゐるという通報が入つたといひ、あるいはまた駐車場から出る悪臭のためにしよつちゆう苦情が入つてくるので注意しに行つたら大声を張り上げられた話もしたという。お金を出してやればおとなしく帰るといふ父の言葉に従つて、母はお金を封筒に入れて帰つてもらつたが、時間が経てばまたやつて来ると思うとうんざりすると言つた。

「実は、お前に駐車場の営業を止めようと言うために昼食前に来たのだよ。ところがお前がいなかつたんだ。おかしいと思つて胸がどきつとしてね、待つても待つても帰つて来ないし。けれ

どもここがあるからきつと帰つて来るはずと思つてもずつと帰つて来ないし。この駐車場がなくなればお前をどこで待たねばならないのかと思つたよ。しばらくそう考えていたから、このままにしておこう。またそんな考えになつたよ。」

「お母さん、実はお客さんが来なくなつて長くなるのよ。私がウソを言つてたのよ。もうお母さんの楽になるように決めてください。」

母は溜め息をつきながら私の手をぎゅつと握つた。母はプレハブ小屋に入つていき、昼食にと持つてきた弁当の包みを開け、食膳を用意した。みんな冷めてしまつて勿体ないと言いながら、ご飯の上におかずを載せてくれて、話を始めた。それはこの手のひら程の大きさの土地を所有した経緯だった。

ここにはマツチ箱ぐらゐの粗末な家があつたのだが、両親がソウル暮らしを十年してようやく手に入れた家だった。場所が非常によくて運が向いたのか、長男が大企業に就職し、次男は税理士になり、末っ子の娘は女子大を首席で入学し、家をもう一軒買うぐらゐに余裕ができた。三十年前の好景氣の時に再開発事業が始まつて、町の人たちは崩れそうな家を何軒かまとめて壊してビルを建てたり建築業者に売つたりして引越しし、大金を手に入れた。父は自分たちも早く売つてしまおうという母の言に微動だにせず、ただじつとしていた。五〇m離れた所にクリーニング屋の店舗付きの二階建て住宅も所有していて、父はクリーニング屋の仕事でいつも忙しくて、それ以上のことは考えたくなかつたのだった。大学新入生の末っ子が再開発事業工事現場で変死

体で発見された時、両親は町をすべて工事現場にした近所の人たちを恨んだ。結局ビルの谷間にぼつんと囲まれて、大して使い道のなくなった手のひら程の一軒家は家賃二〇万ウオンを貰うだけの貸家になり、その後倉庫になった。母は娘の死から始まった鬱病を紛らせるために看護助手として働き始め、その時に私と出会ったのだった。廃人になりかけている私を自立できる人間にしようと、倒れかかっていた倉庫を壊して駐車場を作った。母は看護助手として出勤していた病院の横の小さな駐車場を見て、ちよつとした金儲けになつて私の助けになるかも知れないと思つて考え付いたと言う。

私はこれまで何度も聞いて書き取っていたので、この長い長い話を覚えていた。母はどこから話を始めても、結局はすべてをしやべつた後、恨みや後悔、悲しみがごちゃ混ぜになつた涙を流してようやく話を終えるのであつた。歳月が過ぎてから、ノートに書いておいたこの話を読んでみると、母の態度は非常に微妙に変わつていつて淡々となり、そして落ち着いてきていることが分かる。七〇歳を越えた今は、自分のことではなく他人事のように話していた。

「奢れる者は久しからず、の諺どおりで、いつまでもいいことは続かないものね。後悔し、恨んで、気をもんだところで何になる？ いい日も悪い日も、みんな過ぎて終わつてしまった。どうせ棺桶に入つて蓋を閉めれば、みんな同じだ。それがどれほど幸福なことか。」

母は食事をしている私の背中をさすつた。私は口の中にご飯をいっぱいしながら、母の言葉を独り言のように繰り返した。そして記憶が混乱して理解できずにいる過去の日々を思い浮かべ

た。覚えていることも懐かしむこともない出来事は単に過去のものであり、元氣いっぱいだった若さを失って長い歳月が過ぎたのである。しかし生きていて幸せだ。幸せだと言えること自体が幸せなのだ。